

明日 への 話題

空間の拡大



預金保険機構
理事長

みくにや かつのり
三國谷 勝範

一国の金融セーフティネットは、現実の破綻経験の中で、業態、各種法制とビジネスモデル、危機の態様、国民意識などに対応し、実戦的な仕組みとして練り上げられてきたものと承知している。そこには、それぞれの歴史と血と汗と涙がこびりついている。

一方、金融セーフティネットの世界でも、国際標準の波が強まっている。BCBS, IOSCO, IAISなどにおける国際標準の議論は、競争条件のレベルプレイングフィールド化を目指す要素が強いのに対し、預金保険制度の世界は、世界全体での安全網の欠如の最小化、破綻の影響最小化のための必要に応じた連携、及び平時における各国のシステム強化支援を目指す面が強いと思っている。

ただし、対話やリサーチにおいて、他国の仕組みを真に理解することはたやすいことではない。同じ言葉であっても、そこには異なる歴史・制度・価値観がこびりついている。日本人にとっても難しい金融整理管財人等の制度を他国の人に説明することと同じく、他国の制度を理解する際の障壁は高い。わかりきることが難しいことをわかって行うことが肝要と思っている。それでも経験と思考を前向きに積み重ねれば理解の度は深まる。どの分野にも共通することと思われる。

翻って、戦後復興期、証券取引法が制定されたほか、預金取扱金融機関においても協同組織金融機関、長期信用銀行、信託銀行等、専門性・分業制を特色とする金融制度が整備された。各分野に供給すべき資金が不足していた時代である。その後これらの空間は、逐次融合と競合を重ねながら拡大を続けてきた。金融ビッグバンや金融商品取引法の制定はその表象でもある。加えて、金融機能のアンバンドリングとリバンドリングは近年一層加速化し、情報機能等における伝統的金融産業と情報産業の融合・競合は期を画すものになりつつある。その先の展開はUNKNOWNの部分が多い。

平成の初め、インサイダー取引規制導入の説明会において、ある証券会社の売買管理部長さんが、「皆さん、これは体で覚えるというのではなく、頭から変えてくださいということですよ。」と説明された言葉が印象的であり、強く記憶に残っている。早耳情報とされていたものがインサイダー情報になった瞬間である。個人的には、体で覚えることと弾力的思考のそれぞれが重要だと思っている。そのうえで、私どもは常にUNKNOWNの世界に向き合っていかなければならないようである。資本市場然りであり、セーフティネットまた然りと思っている。